

新富山大学 芸術文化学部創設記念

## 「工芸都市高岡 伝統と革新」展

平成17年10月、高岡短期大学は富山大学五幅キャンパスと富山医科薬科大学との再編・統合により富山大学芸術文化学部となった。「工芸都市高岡 伝統と革新」展は、この新学部創設を記念し、芸術文化学部教員が地域の産業界や伝統職人の方々とのコラボレーションによる新規制作及び教員の専門分野である作品を高岡市美術館において展示したものである。この目的は芸術文化学部が地域連携の新しい基盤であることを地域と全国に発信することであった。平成17年9月16日から10月16日にかけて開催し、来館者からは高評を博すとともに、今後の地域連携に向けての新たな展開へと繋がるものとなり、所期の目的を果たした。

作品制作や展覧会開催に至る経緯としては、平成16年10月に第1回「工芸都市高岡 伝統と革新」展実行委員会、平成16年11月に第1回実行委員会WGをそれぞれ立ち上げ、展覧会開催までに3回の実行委員会、6回のWGを開催し、種々検討を行った。この間、銅器、漆器工房見学、教員によるコラボレーション作品制作にあたってのプレゼンテーションや意見交換を地元業界の方々と持ち、教員と業界との疎通を深めた。

展示内容は、教員スタッフ19名、連携先42社、個人とで創作された作品の約50点に合わせて、教員のバックグラウンドである金属、漆、木工、デザイン及び塑造、絵画作品の約50点。アルミ、銅、鉄、ガラス、漆、和紙等々の様々な素材を用いての作品は、大作から小品まで多種多様であり、教員の創造的感覚と伝統職人の巧みな技により生み出された作品の完成度は高いものであった。今回の展示の大きな特徴としては、ただ単に作品を展覧するだけではなく、来場者の方々に魅力を肌で感じ取って頂くために、作品を直に触れることのできる展示ブースを出来る限り採り入れたことである。

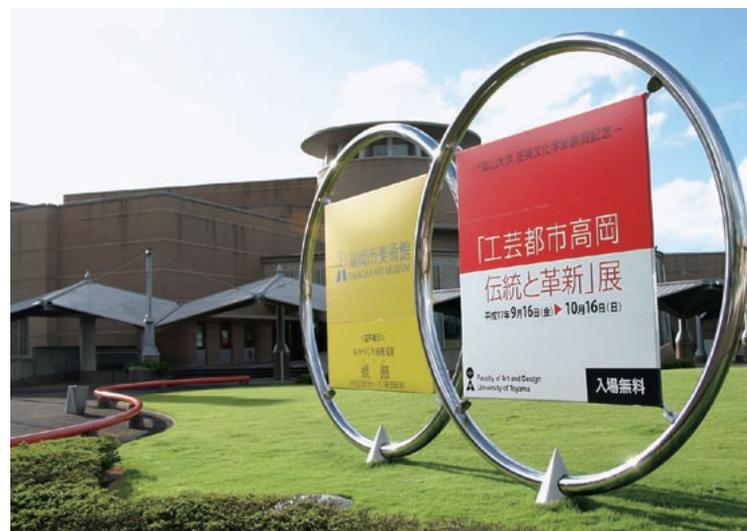
また展覧会に合わせて9月30日にウイング・ウイング高岡4階ホールに於いて、「世界が注目する日本の芸術文化」をテーマに、欧米で活躍する日本人のパネリスト4名を招いて、記念フォーラムを開催した。これには

高校生から一般社会人に至る多くの聴衆の参加があった。

今回のコラボレーション制作や展覧会及び記念フォーラムの開催に際し、高岡市、高岡市美術館、高岡市デザイン工芸センター、高岡市商工会議所、社団法人高岡アルミニウム懇話会、伝統工芸高岡銅器振興協同組合、伝統工芸高岡漆器協同組合より、予算や企画等において多大な尽力を頂いた。

以下は、作品および記念フォーラムの概要である。

安達博文



# 「工芸都市高岡 伝統と革新」展



■会期 平成17年9月16日（金）～10月16日（日）

■会場  高岡市美術館  
TAKAOKA ART MUSEUM

■主催

「工芸都市高岡 伝統と革新」展実行委員会  
高岡市  
高岡市美術館  
高岡市デザイン工芸センター  
高岡商工会議所  
社団法人高岡アルミニウム懇話会  
伝統工芸高岡銅器振興協同組合  
伝統工芸高岡漆器協同組合  
高岡短期大学

■後援

富山県



特別出品



教員名：  
木村 光佑  
Kouske Kimura  
専門分野：  
現代美術・芸術学

作品名：  
“アウト オブ タイム《OUT OF TIME》”

連携先：  
タカラスタンダード株式会社



“アウト オブ タイム《OUT OF TIME》” 146.0 × 110.0cm  
材質 ホーロー

ホーローは七宝やエナメルと同じ技法で、鋼鉄に天然の原料やガラスの釉薬を焼き付けたものだ。古代エジプト期のツタンカーメンの装身具や、日本の古墳から出土した飾り金具にも使われている。酸やアルカリによる変質はなく、傷つきにくくて変色や退色もない。発色もよく光沢も衰えないのは、古代の作品で証明済みである。

鋳物などの伝統技術と接点を持つ事で、新しいコラボレーションも考えたいと思っている。

今回のコラボレーション制作による作品展示は「アウト オブ タイム」146.0×110.0cm、「飛翔」85.0×95.0cm、「バラY」121.0×86.0cm、「バラR」121.0×86.0cm、「バラW」121.0×86.0cmの五点。

上段：左から「飛翔」、「バラ《ROSE》-Y」、「バラ《ROSE》-R」、「バラ《ROSE》-W」

下段：「立山(連峰)賛歌」と文楽シリーズ



## 教員出品



教員名：  
安達 博文  
Hirofumi Adachi  
専門分野：  
絵画

作品名：  
“塗装デザインによるデモンストレーションミニカー”

連携先：  
昭和自動車株式会社、有限会社 タケオカ自動車工芸



塗装デザインによるデモンストレーションミニカー

芸術文化学部の広報を目的に、ミニカーの車体への絵画制作を行った。制作における行程は、前処理として車体にウレタンサーフェサード下地塗装の後、黄色ペイントによる下塗りの吹き付け塗装（4層）を行い、アイデアスケッチを基に黒色ペイントでの線描きと色面への彩色を筆にて作画した。その後クリア吹き付け塗装を三層施し、最後にカッティングシートで作製した学部ロゴマークの位置を決定し、車体に貼り付けて完成。

■制作に要した期間は、約1ヶ月。使用塗料はデュボン社製。混合比は、塗料+バインダー(4容量)に対して、硬化材(1容量)—重量比である。今回の連携における制作では、約40年間に渡って塗り士として従事されている昭和自動車(株)岡田氏の塗料調合への色彩感覚に敬服した。



掛け時計

作品名：  
“掛け時計”

連携先：  
高岡漆器株式会社、有限会社 アート工芸社

顔面をモチーフに、漆素材によるインテリア用掛け時計の制作を行った。アイデアスケッチと図面を基にCADによる完成予想図を作成し、実寸木地をNCルーターにより制作。長針、短針はアルミ板への腐食法を用い、秒針は手曲げにより作製。木地への漆塗りは塗師内島昭夫氏に依頼する。塗りの工程は次の通りである。1. 木地に糊漆で布(麻布)貼り。2. サビ付けを4層。3. 研ぎ。4. 中塗り(黒漆)。5. 上塗り(色漆—朱、黒、紺)。塗料の乾燥後、ムーブメントを取り付け、さらにアクリル絵の具により着彩した長針、短針、秒針の取り付けを行い、完成。

■制作に要した期間は、約5ヶ月。高岡という一つのお小さな地域にあって、優れた技術力を持った様々な職人の方々が数多く存在していることにあらためて驚いた。



教員名：  
ペルトネン 純子  
Junko peltonen  
専門分野：  
金属工芸

作品名：  
“和紙によるショルダーバッグ”  
連携先：  
有限会社桂樹舎、BAG・PURSE どね donner



完成したショルダーバッグ

#### ■作品説明

軽さと強度を併せ持つ強製紙という和紙、縫製加工のノウハウ、そしてアイデアによって丈夫でシンプルなバッグとカードケースが出来ました。

#### ■職人さんとの連携で感じたこと

今回の作品は、これまで扱ったことのない素材や技法による制作ただだけでなく、職人さんとの連携が中心となっていました。その中で、職人さんの制作に対する意欲や好奇心の強さに驚かされました。その力があつたからこそ、どうにか形にすることが出来たのだと思っています。

#### ■今後の教育や研究への展開に関する抱負

今回の作品は、アイデアと職人さんの技術や知識との融合による作品を完成させることばかりにとらわれ、制作途中の重要な検討過程を見過ごしていたと感じています。この経験を踏まえ今後は、どのような過程をたどるかということをよく検討していきたいと考えています。



カードケース

作品名：  
“カードケース”

連携先：  
有限会社桂樹舎



教員名：  
貴志 雅樹  
Masaki Kishi  
専門分野：  
建築デザイン

作品名：  
“アルミの茶室”

連携先：  
社団法人 高岡アルミニウム懇話会、STプロダクツ株式会社  
三協アルミニウム工業株式会社、株式会社広上製作所



#### ■作品介绍

アルミ製の組み立て式「茶室」である。構造はパネル構法で、H2400 × W600 × T39のアルミハニカムパネル12枚とパンチングメタル4枚で壁を構成する。天井は4枚の厚さ2mmのアルミパネル、床はアルミハニカムパネルと琉球畳で、アルミ角パイプの土台4ピースがこれを支える。組み立て方法は、4~5人で、工具を用いず、パネルとパネルをインサートしていけるディテールにした。

アルミのシルヴァー色をマット仕上げに表面加工を施すことにより、深い銀色となり、工業製品の素材ではあるが、「わび」「さび」という日本の美意識を表現する。アルミの材質は軽量で、移動、組み立てが簡単で、日常的な空間を容易に非日常的な空間に変容させることが可能である。

#### ■連携

サッシュメーカーとの協働において、既製の部材を利用する提案があったので、比較的安価に制作できた。今後、防水に対するノウハウの蓄積から、外部使用の「茶室」の制作も可能である。

#### ■今後の展開

2002年5月、アルミニウム合金が、建築材料として正式に認定を受けた。アルミのヴァージンメタルを精錬するには、大量の電力を必要とするが、リサイクルするには、大きなエネルギーを必要としない。安定した酸化皮膜による耐候性の高さ、軽量で加工性の良さなど、エコ素材として、今後の建築素材としての可能性を探りたい。





教員名：  
林 暁  
Satoru Hayashi  
専門分野：  
漆工芸



教員名：  
小川 太郎  
Taro Ogawa  
専門分野：  
漆工芸

作品名：  
“小型電気自動車のデザイン提案”

連携先：  
有限会社 タケオカ自動車工芸



富山市安養寺にある、有限会社タケオカ自動車工芸とのコラボレーションで、同社の現行車で、1人乗り電動コミューターの「リミュー」の次世代モデルのデザイン開発を行った。石油の受給が将来ひっ迫するであろうという予想の中で、こうした環境負荷の少ない小型の電動コミューターの需要が増えるであろうと考えた。富山県はこのような小さな車を作っている企業が幾つかあり、いずれも企業規模としては小さいながら基本設計から自社開発しており、創造的なコンセプトを持つ製品を発表している。そうした企業に対してわが芸術文化学部としてデザイン面での参画ができれば、地域における大学としての意味もある考え、デザインの共同開発を申し出た。幸い武岡栄一社長の理解も得られ、このプロジェクトが動き出すこととなった。



三次元 CAD を用いたデザイン制作

現行モデルは武岡栄一社長がほとんど全ての車体設計を行い、さらにボディーデザインもこなし、制約される条件の範囲内で良くまとまった車である。このような全体のコンセプトを引き継ぎながら、次世代モデルは曲面を多用して、自動車らしく美しいデザインになるように心掛けた。

パワートレインや使用部品の制約など考えなければならぬ問題が多く、武岡学専務とも相談をしながらデザインを決めていった。最初に4~5点のデザインをコンピュータ上(三次元CAD)で行って自らのデザイントレーニングとし、幾つかは先方にプレゼンテーションした。幾らかコンセプトがまとまった時点で3種類の5分の1のクレイモデルを制作し、先方の指示を仰いで大方のデザインを決定した。その後、モデルを実測して再度三次元CADに入力してデジタルデータとし、それを基に小型のNC切削機で発泡ウレタンを削り出してつなぎ合わせ、原寸大のモデルを制作した。



CAD データから削りだしたパーツを組み上げ原寸モデルを制作

私自身の専門は日本の伝統を核とする漆工芸である。作品制作の中で最近興味を持って研究している3次元CADを、今回のデザイン提案に活用出来たことを喜ばしく思っている。学生の協力も今回のプロジェクトに、大いに貢献している。未だにデザインの変更など少しずつ改良が為されており、実際の生産ラインに乗せるべく努力しているところである。



教員名：  
林 暁  
Satoru Hayashi  
専門分野：  
漆工芸

作品名：  
“iPod の印籠型ケース”

連携先：  
有限会社 嶋モデリング



アップルコンピュータ社から発売された iPod mini の印籠型ケースを考えた。iPod mini の形自体が印籠と似ていることもあり、音楽をデジタルデータで携帯して楽しむためのアイテムであることから、印籠型のケースは楽しいだろうと思い、3次元CADで二種類のデザインを考え、嶋モデリングの嶋光太郎氏に木地の制作を依頼した。氏は高岡短期大学の卒業生であり、CAD,CAM を活用した木型制作を生業としている。CAD,CAM についての最初の手ほどきを私が行ったが、今では先生の私を、技術的にも追いこし、実社会で活躍していることを誇らしく思っている。

印籠は縮み空のある枋を根付・尾締・本体部共にNC切削機で削り出し、拭漆を行った。上下の空理を合わせなければならぬので、切削には細心の技術を要した。



教員名：  
小川 太郎  
Taro Ogawa  
専門分野：  
漆工芸

作品名：  
“変わり塗りのアクセサリー”

連携先：  
源 謙次



刀の鞘への装飾として発展してきた、変わり塗り(鞘塗り)と言われる加飾技法が有るが、近年はその多くの技法があまり使われなくなって来てしまっている。

今回は高岡の変わり塗りの名手、源謙次氏に変わり塗りを主体としたアクセサリーの製作に多大な御協力を得ることが出来このような形で展示する事が出来た。

アクセサリーの様に小さなものに変更塗りを施すので、使う道具などを源氏との間で工夫を重ね、仕掛けを小さくし、塗りを薄くし、研ぎは細心の注意を払いながら、慎重に行っていた。

かつて鞘塗りと呼ばれ、男の懐に有った刀の鞘を飾っていた変わり塗りには、現代のアクセサリーとしての十分な魅力があり、これから普及していく可能性が大いに有るのではないかと思い試みてみた。



教員名：  
小松 研治  
Kenji Komatsu  
専門分野：  
木材工芸

作品名：  
“edge (エッジ)”

連携先：  
株式会社 高田製作所、松岡研磨工業所



この作品は形を構成する「エッジ」に焦点を当てて制作したアルミニウム製の立体物である。用途を考慮してスタートするデザインではなく、エッジを強調した造形を先に行い、後に用途を付加することで実用品デザインへと発展させるアプローチの試みである。鋳造は高岡市の高田製作所と、そして仕上げの磨きは松岡研磨工業所と連携して制作したもので、両社の技術の高さに驚かされると同時に、新たな創作意欲を刺激されることになった。



作品名：  
“干支 (酉、鼠)”

連携先：  
有限会社 ハイヒル

この作品は、高岡の有限会社ハイヒルが商品化した“漆塗り技法見本”「マテリアルプレート」を介して、同社と連携して制作したものである。制作した木地を持参して、プレートの製造者の一人である織田走男氏の工房を訪ね、希望する塗り方を「マテリアルプレート」の中から選んで制作依頼した。工房では、美しい漆の表情を身近なものに使用したいという私の制作意図を伝え、文様のイメージについて詳細な打ち合わせを行った。異なる専門分野が通じ合ったとき、何か新しいことが生まれるのだという可能性を強く感じる事ができた。





教員名：  
武山 良三  
Ryozo Takeyama  
専門分野：  
サインデザイン

作品名：  
“Desktop Signs”  
連携先：  
株式会社 高田製作所、株式会社 ウイン・ディー



芸術文化学部に設けられる5つのコースをシンボライズし、5つ目のシンボルを5コ制作した。



高田製作所は鋳物製作を担当。



ウイン・ディーは、切削データの作成と原型加工を行った。

#### ■シンボルマークは組織の顔

シンボルマークは組織の理念を象徴し、その顔となって、人をまとめ、あるいは繋ぐものである。企業などでもお客様を迎えるサインとして活用されているが、扱いはことのほか貧弱である。社長室には高価な置物が置かれていたりするが、本来はシンボルマークにこそこだわりを持ったものづくりが成され、大切に飾られるべきである。

このプロジェクトでは、芸術文化学部創設に向けてデザインされたプロモーション用マークをモチーフに、卓上サインを企画した。今までにないデザイン展開を目指しCAD/CAMによる原型制作を行い、仕上げについては、連携先である高田製作所よりアドバイスを受け、サンドブラストと研磨仕上げを併用した。5つのステンレス球は当初固定する予定であったが、穴の中で転がる様子が楽しく、動く状態で展示した。

#### ■職人さんとのコラボレーション

高岡には、数多くのものづくりの工場がありながら日頃はなかなか訪れる機会もない。今回の共同制作では、高岡の現場が持っている優れた技術や、一方でそれを売りに上げて結びつける上で課題になっていることなどを具体的に知ることができた。また、何より幾度も打合せを通して、コミュニケーションが図れたことが大きな収穫になった。

#### ■これからの期待

サイン業界では、ABS樹脂にメッキ処理したものなど、金属を用いずに鋳物の風合いを出した製作方法も定着しつつある。価格の安さや取付方法の簡便さなど優れた点もあるが、一方で、重厚感や長年の使用による独特の素材変化、そこから生まれる愛着などは真似のできるものではない。否定的に捉えられがちな、高い、重い、手間がかかるといった鋳物の特性を肯定的に捉え、だからこそ売り物になる商品として今後もサインにこだわったデザインを行いたい。



教員名：  
高橋 誠一  
Seiichi Takahashi  
専門分野：  
漆工芸

作品名：  
“石材と青貝細工のカードホルダー”

連携先：  
有限会社 佐野本家石材工業、有限会社 武蔵川工房



石材加工業者、青貝細工職人の協力を得て、黒御影石の磨きの光沢と青貝細工の光を対比させるものを提案した。黒御影石の正方形、正三角形、楕円の薄板を、紙の入る隙間を作るため、間にアクリル板を挟み込みながら5枚重ねて形を作った。御影石の側面に、七宝つなぎ、麻の葉文様、長方形の敷き詰め等、青貝細工で加飾をした。黒御影の独特の黒色と、青貝の光は、とても調和するものだと、認識出来た。



教員名：  
清水 克朗  
Katsuro Shimizu  
専門分野：  
金属工芸

作品名：  
“酒器 杯”

連携先：  
天野漆器株式会社、源 謙次、内田木工所、  
有限会社清都酒造場、高岡銅器有限会社



高岡は銅器, 鋳物の町です。また、米どころ水どころであり、当然、おいしいお酒があります。そこで、そのおいしいお酒を飲むための、鋳物の酒器を提案しました。銅を主体とした合金、錫青銅、赤銅、四分一などなど、色々と試しています。着色は煮色です。高岡の造り酒屋さんと、様々な酒器を試しながら日本酒を楽しむ器について語り合いました。器によってお酒の味が変わる不思議を発見し、確認し、そして何より楽しみながら取り組みました。今後も、このテーマに取り組んでいきたいと考えております。



教員名：  
高橋 誠一  
Seiichi Takahashi

専門分野：  
漆工芸



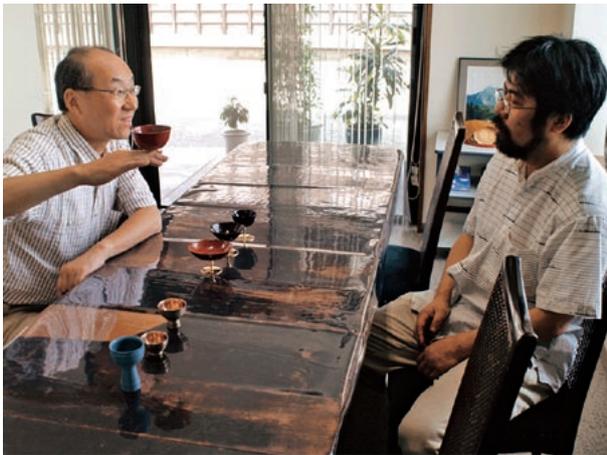
教員名：  
清水 克朗  
Katsuro Shimizu

専門分野：  
金属工芸

作品名：  
“酒器 杯”

連携先：  
天野漆器株式会社、源 謙次、内田木工所、  
有限会社清都酒造場、高岡銅器有限会社

日本酒醸造所、漆塗り職人、銅器製造業者の協力を得て、日本酒で乾杯をする為の杯を提案した。形は、酒造所の方との話し合いにより、椅子席で、テーブルの上で料理に埋まり込まないように、背を高くする事とし、手で持ちやすいように、足を付ける事にした。足を、金属で作る事により、重心が下に来て安定する利点があった。杯の形は4種類、塗の種類は5種類、足の形は4種類、足の着色は5種類作り、組み合わせ次第では、400種類の杯ができるようにした。

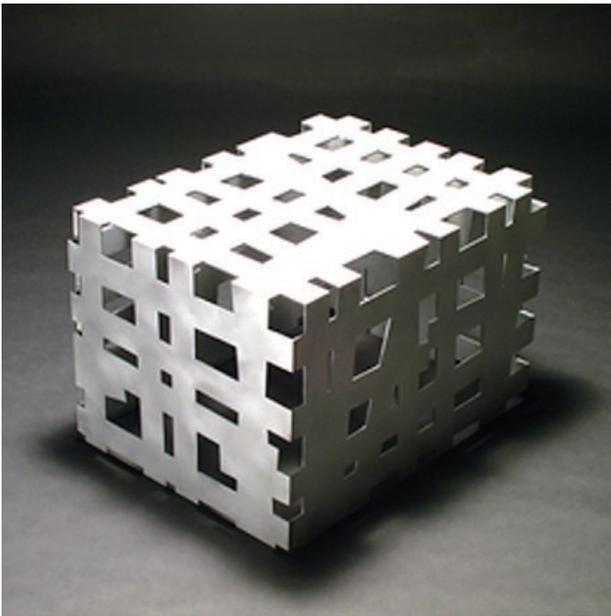




教員名：  
内藤 裕孝  
Hiroataka Naito  
専門分野：  
家具デザイン

作品名：  
“fragile” side table

連携先：  
株式会社 平和合金、有限会社 嶋モデリング

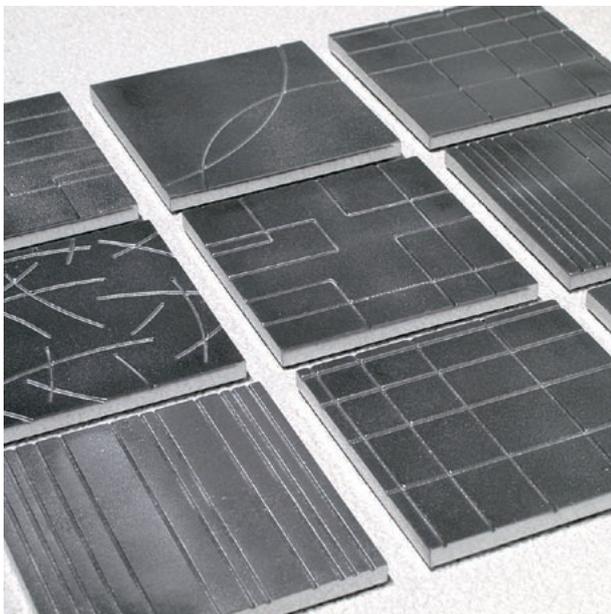


#### ■アルミ製家具

「fragile」は形状の記憶を内包したサイドテーブルです。機能とフォルムとの関係から抜け出し、存在感の強さや視覚的な刺激、そして驚きを与えるユニークな形をコンセプトに、アルミ鋳造技術を用い制作しました。

この作品では、見えない形を「カタチ」にすることで、無意識に「意識」させることを試み、印象に深く残る形状を目指しました。

一見すると一体鋳造のように見えますが、五つの面をパーツとして個々に鋳造しており、パーツのコーナー部を溶接することによって立体的に組み立てています。表面はアルミニウムの素材感を残すため、サンダー研磨の後、クリア塗装で仕上げました。



作品名：  
“face” coaster

連携先：  
株式会社高田製作所、有限会社 嶋モデリング

#### ■アルミ製コースター

生活に彩を添えるアイテムとして、アルミ鋳造製コースターをデザインしました。日常生活のいろいろな場面で出会う「カタチ」をモチーフとし、表面に様々な表情を施しています。コースターの用途の他に、内外装の装飾プレートとしての使用も想定し、一般的な陶磁器タイルと同寸法で設計しました。

鋳型制作時に使用する原型は、CAD/CAMソフトで3Dデータを作成し、NCマシンにより制作しました。鋳造には耐食性に優れたAC7Aというアルミ合金を使用し、砂型を用いて鋳造を行いました。コースター上部はブラスト処理により鋳物の表情を残し、側面はアルミニウムの美しい光沢を出すため鏡面仕上げとなっています。



教員名：  
長山 信一  
Shinichi Nagayama  
専門分野：  
プロダクトデザイン

作品名：  
“MIRAGE (蜃気楼)”  
“mira-cup”

連携先：  
中村美術工芸、株式会社嶋安



■ “MIRAGE”をWine coolerとして使用する

ホームパーティは、現代の日常生活の中に根付きつつある。その中で、パーティの華やかさを演出する名脇役となり得るテーブルウエアの一つにワインクーラーがある。“MIRAGE”はアルミ素材7Aの鏡面の魅力を最大限に引き出すため、外面が鏡面の曲面で構成された造形と、上蓋をざる状にして氷が溶けた水を捨て易くし、本体を容器とした構造である。(外寸:30cm角×厚さ10cm)内側の大きさは約20cm角で、深さは9cm。Wine coolerとして使用した場合には深さ不足とを感じるが、長い瓶は斜めに寝かせ、ワイングラス2こを同時に冷やしてサービスすることが可能である。小振りな、冷酒・ドリンク・スープ等のサービスにも最適なクーラーと言えよう。

■ “MIRAGE”をFlower bowlとして使用する

現代の日常生活には、華やぎ・潤い・安らぎを与えるフラワーアレンジメントやガーデニングが根付いている。特に、生け花に使用される花瓶や水盤はハレを演出する名脇役である。しかし、現代的でモダンなものは余り見当たらない。“MIRAGE”はアルミ素材7Aの鏡面の魅力を最大限に引き出すため、外面が鏡面の曲面で構成された造形と、溶けた水を捨て易くするため、上蓋をざる状にし、底を容器とした構造である。水盤に使用した時、花や葉が鏡面に映り込み、華やぎや豊かさが一際引き立つ。また、手軽な使用には、市販フラワーポットを入れるだけでパーティ仕様となる。

■ 鋳物鋳造業者とのコラボレーション

“MIRAGE”は私がデザインし図面を描き、中村美術工芸の中村喜久雄氏に原型制作と鋳型制作をお願いした。鋳造については、特にデザイン意図である、全て鏡面の曲面で構成されることを前提に、アルミ材料7Aを用いて作る技術力をお持ちの、株式会社 嶋安の嶋 安夫氏に依頼した。

結果、中村喜久雄氏は日展作家のベテランであり、あらゆる技法に精通しており、デザイナーの意図通りに仕上げて下さった。その課程で中村・嶋の両氏の人柄に触れ、高岡銅器の層の厚さを実感した。特に、中村氏の気負わず、前向きな心ばえに共感を覚えた。



教員名：  
渡辺 雅志  
Masashi Watanabe  
専門分野：  
プロダクトデザイン

作品名：  
“J-Glass”  
連携先：  
氏家漆器株式会社、守工房、島田 映



手前：サイズは3種類。外側表面上半分のみ漆塗り。奥：独特なスタッキングスタイル。ガラスの層が上部だけに見える。

#### ■口元に漆を塗ったグラス

飲物が注がれたとき、透明なグラスは飲物の色彩で満たされていく。そっと手を差しのべると、冷やかかで固いガラスと、暖かく柔らかい漆に触れ、素材感の違いを体感する。グラスに口を添えると、これが漆器であることに気づく。飲物の質をキープするガラスと柔らかな飲み口を与える漆。両者の特性を融合させたグラスの提案。

グラスはガラス作家の島田映氏による宙吹きガラス。サイズは3種類。これらは独特なスタッキングスタイルを持つ。

漆塗りは守工房・守弘勝氏による。外側表面上半分のみ塗られた漆は、ガラスのグラスを漆器に変える。



傘は穴にさすだけで自立する。鏡面仕上げはぶっくりとした水滴の表面を模している。真鍮削り出し、クロームメッキ仕上げ。

作品名：  
“a drop of water”  
連携先：  
株式会社藤巻製作所

#### ■水滴の傘立て

傘立てらしくない傘立て。傘がささっていないくても、インテリアの雰囲気損なわない、どこかオブジェのような佇まい。傘を伝った水滴がたまっている。



■連携先

有限会社アート工芸社  
 天野漆器株式会社  
 株式会社ウイン・ディー  
 氏家漆器株式会社  
 内田和弘  
 STプロダクツ株式会社  
 カナヤママシンリー株式会社  
 有限会社清都酒造場  
 有限会社桂樹舎  
 こし村百味堂  
 さいとう漆工房  
 有限会社佐野本家石材工業  
 島田映  
 有限会社嶋安  
 三協アルミニウム工業株式会社  
 塩谷製作所  
 漆器くにもと  
 漆工上野工房  
 有限会社嶋モデリング  
 昭和自動車株式会社  
 寿し「江戸一」  
 設計工房 MandM  
 高岡漆器株式会社  
 高岡銅器有限会社  
 株式会社高田製作所  
 タカラスタンダード株式会社  
 有限会社タケオカ自動車工芸  
 株式会社竹中製作所  
 立川美術着色所  
 富山ガラス造形研究所  
 中村美術工芸  
 銅友鑄造所  
 布目漆器店  
 株式会社能作  
 有限会社ハイヒル  
 株式会社広上製作所  
 株式会社平和合金  
 ぼーべる done  
 有限会社武蔵川工房  
 守工房  
 源謙次  
 [50 音順]

■特別出品

木村 光佑

■出品教員

安達 博文  
 ベルトネン純子  
 小川 太郎  
 貴志 雅樹  
 小堀 孝之  
 小松 研治  
 齋藤 晴之  
 清水 克朗  
 高橋 誠一  
 武山 良三  
 内藤 裕孝  
 中村 滝雄  
 長山 信一  
 林 暁  
 前田 一樹  
 宮崎 雅司  
 丸谷 芳正  
 渡辺 雅志  
 [50 音順]

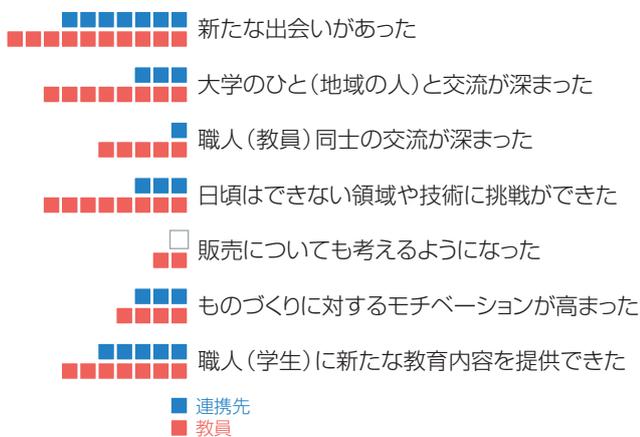
### 制作者アンケート

連携先 : 42 回収数 : 12 回収率 : 28.6%

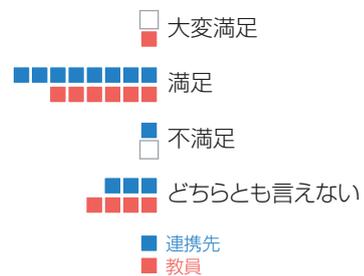
参加教員 : 19 回収数 : 12 回収率 : 63.2%

## Questionnaire

### 1. 今回の取り組みから得られたことは何ですか (複数回答可)



### 3. 作品の満足度はいかがですか



### 2. 今回の取り組みから浮かび上がった問題点は何ですか (複数回答可)

